

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成26年6月5日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科

職 名・学 年 研究員

氏 名 奥 村 悦 子

助 成 の 種 類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第6回国際線虫学会		
発 表 題 目	宿主化学物質が昆虫便乗性線虫 <i>C. japonica</i> を誘引する Host chemical components attract the phoretic nematode <i>Caenorhabditis japonica</i>		
開 催 場 所	南アフリカ共和国・ケープ州・ケープタウン・Southern Sun Cape Sun Hotel		
渡 航 期 間	平成26年5月4日 ～ 平成26年5月9日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃(Taxes, Fees, Charges込)	185,780円
		宿泊料	55,925円
		バス賃(日本国内)	4,230円
		鉄道賃(日本国内)	520円
タクシー賃(日本国内)	1,040円		
タクシー賃(ケープタウン空港送迎、市内)	12,600円		
学会参加登録料	72,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 学会参加に伴った出費は公布を受けた30万を超えており、アメリカ線虫学会からの助成金\$1,000だけでは3分の1以下しかカバーできていなかったため、財団助成を受けることができなかつたら経済的にかなり厳しいものになったと思います。アフリカ枠が30万円であったことが本当に有り難く感じました。採択件数も多く、助成対象が若手・一般に分かれていることや支援対象が多岐に及んでいることも、予算に悩む研究者にとっては救いです。これからも多くの研究者にとって国際交流の機会を得ることができますよう、財団と助成事業が益々発展して頂けたらと思います。		

## 成果の概要／奥村悦子(農学研究科・研究員)

2014年5月4日から5月9日の間に南アフリカ共和国ケープタウンにて開催された、第6回国際線虫学会議に参加いたしましたのでご報告いたします。

国際線虫学会議とはヨーロッパ、アメリカ、南アフリカ、日本など14の国と地域の学会から成る国際線虫学連合によって6年に一度開催される大会です。大会期間中、新たに2つの学会が承認され、16学会連合となる旨が大会本部の報告書の中に記載されていました。今回はアフリカ大陸開催であったこともあり、普段出会う機会のほとんどないアフリカ各国の線虫研究者の参加が多くありました。全体では400名を超えた参加がありましたが、現地の治安に対する不安や渡航費及び参加費などの予算が嵩んだ影響か、参加を見送る海外の友人も少なくなく、また日本からの参加者も私を含めた4人(他に海外で研究中の学生が1人)と、事前に確認していた通り少ないものでした。今大会は“学生の参加を促し、経験を頼り、世界的な食糧安全保障を確実にするために発展途上国に公的権限を与え、線虫学の将来を確実なものにする”をテーマに掲げており、国際線虫学連合からの学生対象の渡航費支援助成や学会単位での若手研究者支援が見受けられ、可能な限りのサポートで若手の参加を支えていました。本大会に参加するにあたって、京都大学教育振興財団の前に募集があったアメリカ線虫学会からの支援に対しては、予定を超えた募集があり、1人当たりの交付金額を当初の半額とする代わりに採用人数を拡大する処置がとられました。私はこのアメリカ線虫学会からの支援と京都大学教育振興財団の助成金を合わせることで参加することができました。

学会に先立ち行われた歓迎セレモニーでは、アフリカの雰囲気を感じさせる finger-food と民族楽器での演奏があり、到着してすぐにアフリカのリズムと力強さを実感できました。旧友たちとの再会を喜び、ここで一気に参加者の雰囲気がまとまったような感じがありました。学会が始まると、聴きたい発表がある部屋を渡り歩き、休憩時間には語らいながら脳へ糖分とカフェインを補給し、昼食はアフリカの食材と味付けを堪能し午後への活力としました。

プレナリー・セッションでは、Dr. Melakeberhan(ミシガン州立大)とDr. Chitwood(USDA 米国農水省)による講演があり、それに続いて一般講演は全部で14セッションに分かれており、口頭・ポスター発表合わせて440講演の登録がありました。私は Nematode Interactions (線虫相互作用) というセッションに登録し、“Host chemical components attract the phoretic nematode *Caenorhabditis japonica*” という題目で、細菌食性線虫である *C. japonica* が便乗共生関係をもつ亜社会性昆虫ベニツチカメムシ特異的体表物質について、今回は宿主認識の指標として線虫が利用している可能性のある候補化合物質に対する誘引効果を発表いたしました。1日目の発表だったので、憧れのアフリカに来た!という勢いそのまま、緊張も程々に終わらせることができました。あまり大きくない部屋でしたが、多くの人に来ていただいて驚きました。

私がよくいた会場は、3つに分かれた会場の中で1番小さい部屋で、これはそのまま線虫学の情勢が表れています。日本国内、国外における最大勢力は農業に直結した害虫種に対する対抗策で、次いで生物農薬やモデル生物 *C. elegans* を含む生命科学、野外の多様性を調べた線虫層、新種や形態分類学、他生物との相互作用などがあります。アメリカやヨーロッパ、南米などの農業大国はもちろん、これから農業経済的に伸びる可能性が大きい途上国ではほとんどが農業害虫を扱っており、また線虫研究者が依然として存在しない国から学生を教育とトレー

ニングプログラムで先進国に受け入れている取り組みの成果として、着実に途上国の若い世代が育っています。一方、残念ながら我が国では若手研究者が少なく、さらに私の研究に近い類似研究者が少ない中で、今回の南アフリカ大会で新たな同業の友人が増えたことは素直にうれしく感じました。こうした国際学会に出席して色々な国の組織や体制、研究内容やネットワークなどについて直接会って話ができる度に、横のつながりが広がることの有り難みを感じます。特に今回は、私が取り組んでいる線虫の宿主認識に近い内容、もしくは手がかりとなってくれそうな研究があったことも刺激になりました。また、今後の研究方針や技術的協力について相談できる相手ができただけでなく、大きな収穫でした。

今回、6年に一度という貴重な機会であることに加え、南アフリカという個人的にも非常に魅かれる(自然・地理・歴史)開催地でしたので(マンデラ元大統領存命中には間に合いませんでしたが)、参加させていただくことができましたこと、心より感謝しております。有り難うございました。



集合写真 (撮影日時が変更になり全員参加ではなかった)